

「良心教育」よりも「悪心教育」 ～レントに想う

越川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。

誰がそれを知りえようか。

心を探り、そのはらわたを究めるのは

主なるわたしである。

それぞれの道、業の結ぶ実に従って報いる。

(エレミヤ書 17章9—10節)

「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」

(マタイによる福音書 7章11—12節)

レントに想う

～「善」と「悪」

キリスト教会の暦で言いますと、今はちょうど、「レント」という期節に当たっています。レントはキリスト教の最大の祭りである「イースター」に先立つおよそ40日間(正確には46日間ですが)のことです。イースターは皆さんもどこかで聞かれたことのある言葉かもしれません。日本語では「復活祭」と訳されていますが、今からおよそ2000年前、キリスト教の開祖であるイエス・キリストが十字架で処刑されて殺された後、3日目に復活したことを祝うのがイースターです。教会ではこの復活祭に先立つ期節をレントと呼び、この期間には、常日ごろの自分の生き方、自分の行いや言葉や思いを神の前で深く顧みるということになっています。言ってみれば、レントは自省の期節、反省の期節になるわけで、人間の中にある「悪」というか、ネガティブな面と向き合うことが求められているのです。

皆さんは自分のことを悪人だと思いませんか。それとも善人だと思っているのでしょうか。そんな質問を面と向かってされても、大半の人はどちらもでないというか、どちらでもあるような、どっちつかずの答えを思い浮かべるのではないのでしょうか。

たしかに人間というのは「善」だけとか「悪」だけというのはめったにいないというか、まったくいないのかもしれませんが。私にせよあなたにせよ、ひとりの人格の中にふたつのものが並存しながら、せめぎあっ

たり葛藤したりしているのが、まあふつう私たちの考える人間ということなのでしょう。

ところで先ほど読んでもらったエレミヤ書によれば、「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。／誰がそれを知りえようか」と記しています。

昨年、新しく翻訳されたばかりの『聖書協会共同訳 聖書』というヴァージョンによれば、同じ箇所が次のように翻訳されています。

「心は何にも増して偽り、治ることもない。／誰がこれを知りえようか」。

ついでに並べておくと、2017年に出版された『新改訳聖書』（2017年版）では、「人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒やしがたい。／だれが、それを知り尽くすことができるだろうか」と訳されています。

「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる」。

「心は何にも増して偽り、治ることもない」。

「人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒やしがたい」。

原文は同じものですが、まあそろって、人間というモノ、人間の心はどうしようもないものだ、救いようがない、絶望的だ・・・と訳しているわけです。

エレミヤ書だけがそう言っているのかというと、そうではなくて聖書の中では人間というのは悪いものだ、どうしようもないものだという文言はけっこうあちこちにでてくるのです。聖書の最初におかれた創世記という文書の中に「ノアの箱舟」の物語が載せられているのですが、その結末のところ、神さまが独り言のように語る次のような言葉が出てきます。

「人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ」（8章21節）。

生まれた時から人間は悪に染まっていると言うのです。さらに詩編53編には「皆ともに、汚れている。／善を行う者はいない。ひとりもない」（53編4節）というフレーズがあって、これは新約聖書の中でパウロが引用していることでよく知られています。

聖書の人間観

ことほどさように聖書の中には人間に対する厳しい見方というか、絶望的な人間観がはっきりと述べられているのですが、それでは聖書の人間観、キリスト教の人間観は「性悪説」なのかというと、そういうわけでもないのです。

ちょっとややこしく思うかもしれませんが、私の理解する限りでは、聖書の人間観、キリスト教の人間観というのは、むしろ「性善説」であり、「人間は良いものである」という見方が根底に流れていると思っています。

なんだそれじゃエレミヤ書などに書いてあることと矛盾するじゃないかと思うでしょうが、これもまたそういうわけでもないのです。現在、私たちが手にする聖書、旧約聖書の冒頭には、天地創造や人間創造の物語が残されています。そうした物語の中では、神が最初に創造された世界や人間は「良いものであった」というメッセージがはっきりと述べられています。善い方である神が始められたのだから、この世界も人間も良いというのです。

ところが、この良い世界、良い人間が墮落してしまったという物語が、天地創造や人間創造の物語のす

ぐ後に続いてでてきます。アダムとエバという最初の人間たちが、神との約束を破り「罪」を犯す。それによって、人間と神の関係は破れ、人間と人間の関係も破綻し、世界に「悪」が蔓延するようになってしまったという物語です。

聖書、キリスト教というのは、大雑把に言ってしまうと、そうした墮落してしまった人間がどうしたらもう一度、神との良い関係を取り戻すことができるか、人間同士の良い関係を取り戻すことができるか、ひいてはこの世界がもう一度良いものへと回復することができるかということを、テーマにしている宗教だと言えると思います。

そういう大きな流れの中で、今この時、人間の陥っている問題に満ちた現実、どうしようもない人間の弱さや愚かさを、レントという期節にとくに深く顧みましようということを、キリスト教では勧めているわけです。

「良心教育」って何だ？

さて学年や学期の始まりのこの時期に、ずいぶん暗いメッセージだと思われるかもしれませんが、私は今年で同志社大学に勤め始めてから18年目を迎えます。考えてみると、数年に一度くらいずつの割合で、この学内でとんでもない事件や問題が起こるのを経験してきたように思います。その中には、現役の学生によって引き起こされた殺人事件もありましたし、学生による女性暴行未遂事件もありました。学生ばかりでなく教職員が関わる社会的な事件が起こったこともあります。そして去年は職業安定法違反で同志社大学の男子学生が逮捕されるという事件が起こりました。

職業安定法違反などというと何だか分かりにくそうですが、要するにナンパして個人的に親しくなった女子大や専門学校の学生を自分の働いている店に連れて行き、高額の飲食をさせたあげく、その借金を返済させるために性風俗店に「紹介」し、その仲介料で莫大な金を得ていたという事件です。同志社の学生だけでなく、かなりいろいろな人間が関わって組織的なかたちで行われていた犯罪で、犠牲になった女性は260人以上に及ぶと報道されています。

偶然とか突発的なかたちの事件ではありません。明らかに確信犯であり、計算尽くでマニュアルのようなものまで用意し、最初からだますつもりで相手に近づいていくという手口、相手の好意を裏切って利益をむさぼるというこうした巧妙なやり方というのは、これまで同志社大学の中で私は聞いたことがありません。

2万数千人もの学生を擁する同志社大学であれば、時にはそういった学生が出ることもやむをえないかもしれない……などということではすまされない出来事だと思います。

近年の同志社が「良心教育」をキャッチフレーズのようにしていることは皆さんもよくご承知だろうと思います。キリスト教文化センターでもいろいろなお知らせやパンフレットなどに、「良心教育」という言葉をしばしば使っているのですが、個人的に言わせてもらおうと、どうも正直なところ、この言葉の意味がよく分からないというか、こういう言葉を正面切って使うというのは何となく気恥ずかしいような感じがするので。

「良心」って何だということがそもそもよく分からない。またそうしたものをほんとうに「教育」できるのか、どうしたら「教育」できるのかということもよく分からない。新島襄は、同志社の徳育の基としてキリスト教主義を掲げているのですが、私に言わせると、キリスト教教育がそのまま「良心教育」なのかということ、こ

れもまたよく分からないところがあるのです。

「悪心教育」の必要性

私は決して皮肉やてらいからではなく、「良心教育」よりもむしろ「悪心教育」をこそ、まず最初にするべきなのではないかと思うことがあります。人間というものがどれほど悪いものになりうるか、自分自身の中に自分でも抑えの効かないような邪悪な部分や暗い深淵のようなものを抱えているのが実は私たち人間の姿なのではないかということを見つめるということこそ、キリスト教教育における重要な一歩になるのではないかと思うのです。

今年1月末、千葉県野田市で10歳の娘を虐待で死に追いやった父親の事件が大きく取り上げられました。娘に日常的に暴行を加えたり冬場に水のシャワーを浴びせたりという出来事もさることながら、母親も一緒になって娘を虐待する側に回っていたといいます。そうしないと父親の暴力が自分に向けられるのを母親が恐れたからだというのですが、なんとも救いようのない話です。さらにまたこの父親も職場では普通の人と見られていたということです。何がきっかけになったのか分かりませんが、一度何かの理由で始まった虐待が、継続し、エスカレートし、周りの人間を巻き込み、取り返しのつかない結果を生んでいったということなのかもしれません。

家庭内の暴力にしる、学校のいじめにしる、さまざまなヘイトクライムにしる、私たちの日常や私たちの周囲に当たり前のように立ち現れる出来事になってきています。「正常と異常」の隔ての壁はごく低いものになってしまっていて、いつ誰が（私が、あなたが）それを乗り越えてしまうかも分からない現実がそこにあります。

皆さんは、ハンナ・アーレントという哲学者をご存知でしょうか。アーレントが書いた『エルサレムのアイヒマン』という本があります。アイヒマンというのは、ナチス・ドイツの時代のユダヤ人大虐殺（ホロコースト）の中心人物です。第2次大戦後、南米アルゼンチンに逃亡していたのを、イスラエルの諜報機関によって発見され、エルサレムに強制連行されて、1961年から裁判を受けたのですが、アーレントはこの裁判を傍聴して先ほどの本を書きました。

この本はいろいろな意味で話題になったのですが、アーレントによれば、ユダヤ人をはじめとする数百万人の虐殺に関わったアイヒマンについて、彼は決してサディストでもなければ異常な人間でもなかった。出世欲に満ちた虚栄心の強い人物だったが、決して愚かではなく、小心で有能な官吏であり、与えられた仕事に忠実な人間、ある意味で平凡な小市民のひとりにすぎなかったといいます。アイヒマンの問題はその完全なまでの「無思想性」、つまり何も考えない、善と悪の判断を行わない、ただ命令に忠実に行動するだけの存在であった、あろうとしたことにあるというのです。この本のサブタイトルは『悪の陳腐さについての報告』というのですが、史上まれに見る犯罪に関わった人物でありながら、その悪の本体がいかにも陳腐なものであるかを暴露しています。

この本が示唆するほんとうに恐ろしいことは、アイヒマンという個人の問題というよりも、彼と同じように、考えることなく、責任を引き受けることなく、ただ命令に忠実に行動するだけの人間が数多く集まることによって、ホロコーストという巨大な悪が遂行されていったという事実です。「陳腐な悪」が積み重なり、組織化され、扇動され、いったん暴走しはじめると、どんな結果を生むか。これは決して過去の問題ではあり

ません。

私たちは考えなければなりません。多くのことを考えなければなりません。その中でも、とりわけ考えなければならないことは、私たちの中にどのような悪が存在するのか、私たちの内なる闇の深さ、深淵を見つめ、熟考することだと思います。

これは決して「自虐的」などと言って揶揄すべきことがらではありません。自分自身の悪を直視しようとすることは、その人が健全であることのしるしなのです。自分の罪を見つめることは、その人がまっとうな人間でありたいと望んでいるしるしなのです。

「良心教育」というものがもし可能であるのだとすれば、私はこうした人間の悪、人間の罪を、謙虚に自分自身の問題として見つめることから始まるのではないかと思います。

先ほども言ったように、キリスト教という宗教は人間とは本来は良きものとして創造されたという信仰を掲げています。そしてまたキリスト教は、やがて最後に神の恵みによって、イエス・キリストによって、人間は再び良きものとして回復される、復活する日がやって来ると信じる宗教でもあります。レントの期節、内なる自分自身の姿を見つめながら過ごしたいと思います。

[参考文献]

ハンナ・アーレント 『エルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告』 みすず書房 2017年

2019年4月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録